

二人の永山

― 歴史を訪ねる旅 (13) ―



下土橋 渡

プロローグ ～ 西郷隆盛と屯田兵構想

1871年（明治4年）秋、西郷隆盛は腹心の陸軍少将桐野利秋に北海道を視察させ、北辺の防御について調べさせます。桐野は1869年（明治2年）に開拓史が置かれた札幌周辺を視察し、ロシア南下の実情を知り、北海道防御が急務であると西郷に報告します。西郷は桐野の報告を基に翌年に、北海道に屯田兵を配備して対露防御と北海道の開拓に当たらせる構想を主唱しました。

西郷は計画の実現をみることなく下野しましたが、西郷の構想は黒田清隆に引き継が

れ、1873年（明治6年）11月、当時北海道開拓次官だった黒田の下で屯田兵創設についての建白書が提出されます。

一、二人の永山

その建白書に二人の永山が連名しています。ともに鹿児島出身の永山武四郎（1837～1904）と永山盛弘（1838～1877年、通称を弥一郎）です。

永山武四郎は、屯田兵制度の育ての親として知られ、鹿児島に帰ることなく北海道に身を埋めた人で、第2代北海道庁長官、屯田兵司令官、第7師団長などを歴任。鹿児島よりむしろ北海道でその名が知られています。

一方、永山盛弘もまた身を以て北方経営に当たらんと志願して開拓使出仕に応じ、将来を嘱望されましたが、西南の役の出兵に異を唱えながらも、参戦し壮絶な戦死を遂げた人でした。若林滋・編著『北の礎―屯田

兵開拓の真相―』(中西出版、2005年5月発行)から文章を引用させて頂きます。

『明治2年(1869年)創設の開拓使には薩摩出身者が多く、西郷の腹心が幹部を占めていた。明治8年で見ると、長官黒田清隆、中判官堀基、幹事調所広丈、安田定則、永山盛弘など七等出仕以上の幹部26名中薩摩出身が11名を数え、開拓使は薩摩閥といわれた。(中略)

(西南の役屯田兵遠征軍の)大隊長は本来なら永山(武四郎)准陸軍少佐ではなく、同姓の永山盛弘(弥一郎)准陸軍中佐が任命されるべきだった。が、盛弘は前年、父親の病気を理由に薩摩に帰り、西郷軍の指揮官として反乱に加わっていた。盛弘は初めは立起に慎重だったが、桐野利秋の強い懇請でやむなく立ち上がったとされる。武四郎は盛弘が屯田兵創設で苦勞を共にした、同郷の自分に相

談もなく帰国したことが悔しくて官舎の床柱を軍刀で滅多切りにしたと「琴似屯田兵百年史」にある。』

二、永山武四郎

永山武四郎は、鹿児島郡西田村(現在の鹿児島市西田町)に薩摩藩士の第四子として生まれます。1868年(明治元年)、戊辰戦争に参加。会津若松戦で勇名をあげるなどして1871年(明治3年)に陸軍大尉となります。当時の新政府では、近代的国家にふさわしい軍備を整えるべく、各藩でバラバラだった兵制を統一することになりました。薩摩藩では以前からイギリス式で訓練を行っており、武四郎もイギリス式を主張。しかし、フランス式に統一されました。

主張にやぶれた武四郎は、そのまま職に留まるのを潔しとせず、北海道の防衛と開拓が自分の新しい使命であると考え、1872年



当時の琴似屯田兵村の様子（琴似屯田兵村兵屋跡で説明板を撮影）

（明治5年）、開拓使八等出仕として北海道・札幌に在勤します。それからの武四郎は、北海道の屯田兵の育成に終始することになります。着任の翌年の1873年（明治6年）

11月に、永山盛弘らと連名で屯田兵制度設立の建白書を提案。翌年10月に屯田兵条例が制定されると、開拓使に新設された『屯田事務局』に配属となり、本格的に屯田兵の仕事に着手します。宮城、青森、山形など戊辰戦争で官軍と戦った土族158戸が第一陣として札幌の琴似兵村に入植します。その後、山鼻、発寒、新琴似、篠路、近郊の江別、野幌などで入植が進み、着実に開墾が行われていきました。

1877年（明治10年）2月15日に西南の役が勃発すると、武四郎は六百数十名の屯田兵からなる第一大隊を編成し参戦します。対戦相手は最も敬愛する郷里の先輩であり、

屯田兵構想生みの親である西郷。筆舌に尽くし難い苦悩だったに違いありませんが、武四郎は私情に流されることなく大隊長として熊本に上陸し果敢に戦いました。

西南の役から帰還した後は屯田事務局長へ累進。その後、1年間の欧米出張をへて1888年(明治21年)第2代北海道庁長官。1889年(明治22年)屯田兵司令官。1896年(明治29年)第7師団長に就任。同年、陸軍中將に進級。

軍を退役した後、貴族院議員に選ばれ、1903年(明治36年)12月議会に出席するため上京しますが、長女の嫁ぎ先の家で病に倒れます。死を悟った武四郎は親しい者たちに『我が軀は北海道に埋めよ。必ずやかの地をロシアから守らん』と述べたといわれます。翌1904年(明治37年)5月67歳で死去。遺体は遺言通り、ひつぎのまま上

野から札幌に汽車で運ばれ、札幌市豊平墓地に葬られました。葬儀の日、永山邸から豊平橋の沿道に別れを惜しむ長い人垣が続いたといわれます。現役時代は屯田兵を掌握し軍部内では一大勢力でしたが、本人に政治的野心はなく、中央の政治抗争のためにその力を使用することはなかったといわれます。終生北海道を案じ、その身を捧げた武人でした。歴代の北海道庁長官で、札幌に自邸と墓があるのは武四郎ただ一人です。

第2代北海道庁長官となった武四郎は北海道でも特に内陸部の開発に着目し、当時の北海道上川郡旭川村(現旭川市)へ屯田兵村を誘致します。この村は1890年(明治23年)に武四郎に由来して永山村と改名されました。1891年(明治24年)にこの永山村に入植した岡山県出身の屯田兵が出身地の御分霊(天照大神、大国主神)を頂き、祠を



旧永山武四郎邸。木造の邸宅部分（写真上）、洋館の木造クラブ部分（写真下）



いずれも札幌市中央区北2条東6丁目の永山記念公園内

建てて祀りました。これを起源とする永山神社は1912年（明治45年）に現在地へ移され、1921年（大正9年）に永山武四郎が合祀されました。

また武四郎は、本州からの移住を促進するため上川の地に東京・京都に並ぶ『北京』をつくる構想を初代北海道長官岩村通俊から受け継ぎ政府に働き掛けますが、実現には至りませんでした。川上神社敷地内に『上川離宮予定地』の標識がたてられています。

札幌市内の北海道庁旧本庁舎へつながる北3条通りに面した一帯は、かつて開拓使の事業所群が建設されていたところで、開拓使麦酒醸成所（その後サツポロビール）のあった跡地は、現在サツポロファクトリーになっています。その東に隣接して永山記念公園があります。園内には永山武四郎の私邸が保存されているとともに、子供たちのための遊具

設備などのほか、遊水路や広場が整備され、市民の憩いの場になっています。永山武四郎邸は1881年（明治14年）頃に建てられたといわれます。当時開拓使の官邸は十分に整備され、不自由はなかったはずなのに自ら札幌に家を建てたのです。北海道に骨を埋める覚悟であったことがうかがえます。

三、永山盛弘（弥一郎）

永山盛弘は、永山休悦の第1子として鹿児島郡荒田村（現在の鹿児島市上荒田町）に生まれました。名は盛弘、通称を弥一郎。勤王の志を抱き、これに奔走。1863年（文久2年）、有馬新七らに従って京都に上り、拳兵に荷担して失敗しましたが（寺田屋騒動）、年少であるという理由で処罰を免れました。1867年（慶応3年）、京都詰となり、陸軍で教練に励む一方で、中村半次郎（のちの桐野利秋）らと市中見回りをしました。この年、

黒田了介と共に坂本龍馬の元を訪れています。

戊辰戦争では、小隊の監軍として鳥羽・伏見の戦いに参戦。白河攻防戦、会津若松城への進撃で勇戦しました。1869年（明治2年）に鹿児島常備隊がつくられると、大隊の教導となり、明治4年に藩が御親兵を派遣した際には、西郷隆盛に従って上京し、陸軍少佐に任じられました。しかし、ロシアの東方進出を憂えた弥一郎は、身を以て北方経営に当たらんと考え、志願して開拓使3等出仕に応じ、北海道に赴きました。

1873年（明治6年）、いわゆる征韓論が破裂して西郷隆盛が下野し、近衛の将校が大挙して退職しますが、永山は彼らと行動をともにせず、同年11月に黒田清隆北海道開拓次官の下で、永山武四郎、時任為基、安田定則と連名で右大臣岩倉具視に屯田兵創設についての建白書を提出し、ロシアの南下に備

えんと尽力しました。

しかし、政府が千島樺太交換条約を締結したことに憤激して、職を辞して鹿児島へ帰郷。永山の考え方は必ずしも私学校党と同じではなく、政府在官者を無能とはせず、大久保利通や川路利良らに対し一定の評価をし、在官者は日々進歩していると説き、私学校党に与りませんでした。この当時私学校派が幅を利かせていた薩摩において新政府を擁護することとはかなりの勇気のいることでしたが、過去の抜群の軍功と勇敢さによって、批判を受けることはなかったとされます。

出兵するか否かを決した私学校本校での大評議では、大軍を率いての上京については反対の態度をとります。永山の言い分は、西郷・桐野・篠原国幹の三将が数名の供をつれて上京し政府に直に問罪すべきというようなものでした。しかし、西郷の身を案ずる意見

が強く、永山のこの言い分は退けられ、結果として西郷の率兵上京が決定されました。しかし、永山は反対の意思を崩さず、出兵に応じませんでした。これに対し最初、辺見十郎太が説得しましたが不調に終わり、仲が良かった桐野利秋の熱心な説得でようやく同意。結果、永山は三番大隊指揮長となつて、10箇小隊約2000名を率いることになりました。

しかし、熊本城攻囲戦に際しては、最も遅れて到着し、割り込む隙がなかったので、永山の部隊の多くは予備隊として後詰めをしました。1877年(明治10年)2月24日、官軍の第一旅団・第二旅団が南関に着くと、池上四郎に熊本攻囲軍の指揮をまかせ、政府軍を挟撃べく、桐野が山鹿、篠原が田原、村田新八・別府晋介が木留(熊本市内)に出張本営を設け、永山は政府軍上陸に備えて海岸

線に出張本営を設けました。

官軍南下軍が2月の高瀬の戦い以来目立った成果を収めることができず、田原坂をなかなか突破できない状況打開のため、政府は新たな軍の編成に取りかかります。これが、後に衝背軍と呼ばれる熊本南部沿岸(八代市日奈久)から薩軍の背後を衝く部隊の始まりでした。かつて永山の上司だった黒田清隆中将が参軍となり、上陸衝背軍の指揮をとりました。衝背軍上陸の報を受けた薩軍は南下軍を編成し、永山が迎撃軍の司令官に志願し川尻(熊本市川尻町)から進発しました。3月26日、小川(現宇城市)で激戦が始まり、松橋(同)まで後退するも31日には松橋も陥落。4月1日には宇土の戦いにも敗北し、緑川まで後退。

永山は、砲弾の破片を浴びて足腰に重傷を負い、熊本の二本木本営に護送されますが、



官軍上陸之地（熊本県八代市日奈久）



御船の戦いまでの西南の役マップ



永山盛弘は通称を弥一郎といい、明治十年西南の役に薩軍第三隊長となり熊本城攻囲軍を指揮しました。官軍が八代に上陸、背面にせまるにおよんで、一隊をひきいてこれに奮戦しましたが、四月十二日御船の戦に敗れ、ここにあった民家を買収し、大小荷駄税所篤信（鹿児島出身・通称佐一郎）と二人火を放ち刺交えて落命しました。薩将永山盛弘戦没の地（熊本県上益城郡御船町御船 1050 御船クリニック）

翌日、苦戦を聞いて『負けたら二度と諸君らとは見えぬ』との決意を周囲に告げて、止めるのも聞かず人力車に乗って御船へと出陣、大警視川路利良少将の別働第三旅団との戦いの指揮をとりました。御船では逆さに置いた酒樽に腰掛け、長刀を振るい、兵たちに『今日こそが貴様らの死ぬ日である。退いてくだらんだら今日は負けた負けたと語り合う日ではない。矢引き刀折れるまで戦い、みな死ぬ』と叱咤激励したといわれます。

しかし、敗勢いかんともなしがたく戦線は完全に崩壊、四面皆敵という状況に陥ったので、近くの農家の老婆に数百円を渡し家を買いい取って、自ら火を付け自刃しました。撤退を勧めに来た荷駄掛の税所左一郎に介錯を頼んだともいわれています（当時の百円というのは、立派な屋敷を一軒新築できるといっほどの大金でした）。享年40。1877年（明

治10年）4月12日のことでした。永山武四郎を大隊長とする六百数十名の屯田兵の遠征隊が4月23日、百貫石港（熊本市）に上陸しますが、このときすでに、永山盛弘はこの世にはいなかったわけです。

弥一郎（盛弘）は戦時、和服の下にチョッキとズボンを着て、戦闘が始まると和服を脱ぎ捨て、短刀を携え身軽になって戦ったことで有名でした。『西南記伝』に『弥一郎、人と為り、沈厚にして寡黙、剛直にして清廉、裁断に長ず、而も其人に接する、穏和にして義に富む、故を以て、婦人小児と雖も、皆弥一郎に親まざるは無かりしと云ふ』とあるように、もともと婦人・子供にさえ親しまれる穏和な人で、文事にも秀でていたといわれます。弥一郎が自刃して壮絶な死を遂げた御船（熊本県上益城郡御船町）は、鹿児島県の著者の自宅から高速道路を使って2時間余り。

1月下旬の休日、ほぼ一日がかりで出かけてきました。御船の市街地にはいると中心部の国道445号沿いに御船クリニツクという病院があつて、その駐車場に『薩将永山盛弘戦没の地』という木製の碑が建っていました。

御船の戦いは両軍で数百の戦死者を出し、ために緑川は血で染まったといわれます。御船クリニツクのすぐ裏手は緑川の支流・御船川の流れになっています。その寒々とした冬枯れの河川敷を歩きながら、弥一郎のことを偲んでみると、北海道札幌に訪ねた道庁赤れんが（北海道庁旧本庁舎）などの佇まいが思い出されてくるのでした。

【参考にした図書とサイト】

- (1) 若林滋・編著『北の礎―屯田兵開拓の真相―』中西出版、2005年5

月発行

(2) 永山弥一郎―ウィキペディア

(3) 西南戦争―ウィキペディア

(4) 北海道150年。もう一人の武四郎
(北海道マガジン「カイ」)

―補遺―

天台宗大雄山南泉院（鹿児島市花尾町）住職・宮下亮善和尚が事務局長を務める『西南之役恩讐を越えての会』は南洲墓地に『西南之役官軍薩軍恩讐を越えて』の供養塔を建立し、2017年（平成29年）9月23日に慰霊法楽を行いました。その懇親会が鹿児島市内のホテルで催され、地元側から八幡正則さん（JA鹿児島県中央会元総合対策部長、JA鹿児島県信連元常務理事などを歴任）が歓迎挨拶をされました。そのなかで永山武四郎にまつわる興味深いエピソードを紹介されていますので、以下に転載させて頂きました。

『恨みに報いるに恨みをもつてするなかれー、という発句経の話も出ました。この類の話が出るたびに思い出すことがあります。それは、以前、北海道旭川の永山神社を訪れたときのことです。永山神社に祀られておりますのは北海道序第二代長官永山武四郎さんです。(中略) お伺いした夜、地元の方も交えてバーベキュー・パーティをやりましたが、そのとき隣合せた初老の方のお話です。

自分は曾祖父が富山から移住して四代目です。祖先の墓参りにときどき富山に参ります。それについても、私たちの恩人の永山長官は「自分は西郷さんと闘ったのだから薩摩には帰れない。自分は北海道の人間になったのだ」と語って居られたと伝えられています。長官がどんなにか辛かっただろうかと思えますねー、としみじみ語られるのです。思わずバーベキューの箸が止まりました。

「あつ！そうか、 そうだったのかー」。

永山武四郎さんは、自分自身で薩摩人永山武四郎と決別されたのだー。そして北海道人永山武四郎に生まれ変わらせたのだー、そうだったのだなー、闘いの場は地獄、死ぬも地獄、生きるのもまた地獄だったのだなー、と思ひ、脛が潤んだことを今でもまざまざと思ひ出します。』

(元九州職業能力発大学校教授)

